

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第169集

岩村田遺跡群

# 西一本柳遺跡XVII

長野県佐久市岩村田西一本柳遺跡XVII発掘調査報告書

2009. 3

佐々木 薫  
佐久市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、佐々木 薫が行う店舗建設に伴う岩村田遺跡群西一本柳遺跡Ⅷの発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 佐々木 薫
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名 西一本柳遺跡Ⅷ
5. 所在地 佐久市岩村田字常木上2328-1
6. 調査期間 平成20年9月30日～10月9日
7. 調査面積 102m<sup>2</sup>
8. 発掘調査の組織  
調査主体者 佐久市教育委員会 教育長 木内 清  
事務局  
社会教育部長 内藤孝徳  
社会教育部次長 柳澤本樹  
文化財課長 森角吉晴  
文化財調査係長 三石宗一  
文化財調査係 林 幸彦、並木節子、須藤隆司、小林眞寿、羽毛田卓也、神津 格、富沢・明  
上原 学、出澤 力  
調査担当者 須藤隆司  
調査員 河原田三男、河原田憲子、小井戸秀元、小井戸厚子、中嶋フクジ、細萱ミスズ
9. 本書の執筆・編集は、須藤隆司が行った。
10. 出土遺物および調査に関する記録類は一括して、佐久市教育委員会文化財課に保管してある。

## 凡 例

1. 遺跡の略称 西一本柳遺跡Ⅷ→INPⅧ
2. 遺構の略称 竪穴住居址→H ビット→P 溝状遺構→M
3. 挿図の縮尺は、遺構1/80、遺物1/4である。なお、各図中にスケールを付したので確認されたい。
4. 挿図の色・スクリーントーンは、赤が赤色塗彩、編み目が粘土・貼床・堀方埋土、斜線が地山を示す。
5. 遺物観察表の△は推定値、\*は現存値、単位はcm、g。
6. 土層説明中の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・(財)日本色彩研究所色票監修1995年版『新版 標準土色帖』の表示に基づいた。

## 目 次

例言・凡例・目次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
1 立地と調査経過	1
第Ⅱ章 遺構と遺物	3
1 概要	3
2 竪穴住居址	3
3 ビット・周溝状堀方	4
4 溝状遺構	4

# 第I章 発掘調査の経緯

## 1 立地と調査経過

岩村田遺跡群は、浅間山南麓端部に発達した田切地形に展開した遺跡群である。田切地形とは垂直に切り立った崖で区画された帯状台地である。13,000年前、浅間山から噴出した超大規模火砕流の浅間第1軽石流が厚さ30mに及び山麓を埋め尽くした。その軽石流堆積物はもろく、水の浸食に極めて弱いため、垂直に崩落した浸食崖を形成したのである。佐久市北部の地形は、西南方向に伸びるそうした幾つもの田切地形からなる。それぞれの台地上は集落立地としての条件をそなえており、北から近津遺跡群、西近津遺跡群、周防燧遺跡群、芝宮遺跡群、長土呂遺跡群、枇杷坂遺跡群、岩村田遺跡群が確認されている。

岩村田遺跡群西一本柳遺跡は、湯川右岸の台地（高位段丘）上にある。標高は692m程である。西一本柳遺跡では、これまでに発掘原因を異とする1～Ⅱの調査が行われている。550軒以上の竪穴住居址が確認されており弥生時代中期から中世にいたる拠点的大規模集落である。特に、弥生時代中期・後期における環濠集落と呼べる溝で区画された計画集落の展開は、佐久地域における重要な歴史的意義を提示している。人面付土器や有孔石剣などの出土遺物がそれを象徴する。

今回、佐々木薫氏が岩村田遺跡群西一本柳遺跡に店舗建設を計画した。そのため、平成20年7月9日に遺構の確認を目的とした試掘調査を実施した。結果、竪穴住居址を中心とする遺構が濃密に検出された。保護協議の結果、駐車場等における現状の変更が少なく遺構が残せる場所は埋土保存とし、建物の建設によって保存が困難な遺構に関して記録保存を目的とした発掘調査を実施する運びとなった。発掘調査は平成20年9月30日から10月9日の期間で行い、10月10日から平成21年3月25日の期間で整理・報告書の作成を行った。



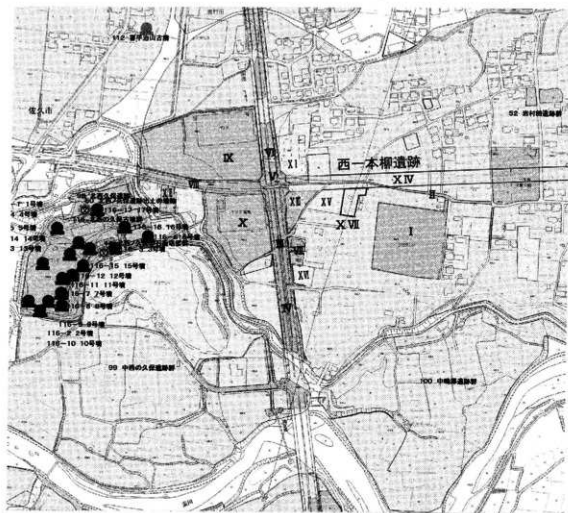
第1図 西一本柳遺跡の位置 (●) (1:50,000)



第2図 発掘調査全体図 (1:200)



第3図 発掘調査区と試掘トレンチの位置 (1:1,000)



第4図 西一本柳遺跡の発掘調査地点 (1:5,000)

## 第二章 遺構と遺物

### 1 概要

調査区東側を主体に擾乱が広範囲に及び明確な確認調査は実施し得なかったが、浅間第1 軽石流を検出而として、以下の遺構・遺物を確認した。

遺構 竈穴住居址4軒（弥生時代後期2軒・奈良時代2軒）、溝状遺構1基（弥生時代中期）

ピット7基、周溝状堀方2基

遺物 弥生土器（中期・後期）、土師器・須恵器（奈良時代）、石器

### 2 竈穴住居址

#### (1) H1号住居址（第5図、表1、写真3～7・17）

調査区中央南に位置する。住居址南半分は調査区外であり、北半部の調査である。また、近代の井戸、ゴミ穴等で擾乱されており、北壁中央に位置するカマドの主要部が破壊されていた。

残存するカマド右袖からカマド主軸方位を推定するとN-6°-Eである。隅丸長方形を呈し、床面東西長は5.2mである。壁残高は調査区南壁セクション部で40cm。カマド右袖部は長さ40cm・幅35cmほどに地山を掘り残した部分と黒褐色粘土と礫を構築材とした部分の残存である。擾乱で主要部が破壊されているため詳細は不明である。ピットは3基確認されており、P1・2が主柱穴と考えられる。P1は32×25×60cm（東西長×南北長×深さ、以下同じ）、P2は55×35×60cmの規模である。また、P1の堀方は80×62×70cm。P2の堀方は78×45×80cmの規模を有し、それぞれ東西に2基分が重複した状況にあった。

出土遺物は、奈良時代（8世紀前半）の須恵器、土師器、砥石、敲石である。第5図1～4は、覆土中に廃棄された須恵器環である（Ⅰ区は住居址東側・Ⅱ区は西側）。特に1と4は北壁際西部に底部を下にした2枚重ねで廃棄されていた（写真4）。ヘラ記号のある4が上で1が下の関係である。須恵器環の底部整形にヘラゲズリが用いられた。6の砥石は覆土、5の敲石はカマド右脇の床面（写真6）上である。弥生時代の刃部を欠損した大形蛤刃磨製石斧であるが、その出土状態から、敲石原料として採取されたと想定できる。調査地点は弥生時代の大集落であり、磨製石斧はいわば二次原石産地の状態で存在していた場所である。使用は図表面下部・上端部・右側縁である。特に表面下部と右側縁下部の剥落が著しい。なお、側縁・上端部にはそれより弱い敲打による潰れがある。弥生時代においても破損した磨製石斧は転用されており、その経歴を厳密には判断できない。また、礫形状を残した6の砥石も弥生時代の可能性がある。

#### (2) H2号住居址（第6図、表2、写真8～10・18）

調査区北西端に位置し、M1号溝状遺構の上部を破壊する。北壁・西壁は調査区外であり完掘していないが、長軸方位N-10°-Wの隅丸長方形が想定される。床面南北長4.8m、床面東西長3.8m、壁残高20cmが確認できた規模である。主柱穴と考えられるピット4基（P1～4）、出入り口部施設に関わるピット2基（P5・6）、貯蔵穴と想定されているピット1基（P7）、床下ピット2基（P8・9）が確認された。主柱穴P1～4は東西に長い楕円形を呈する。P1は25×15×50cm（堀方：32×32×50）、P2は30×13×40cm（堀方：35×25×40）、P3は26×10×40cm（堀方：38×20×40）、P4は40×15×40cm（堀方：50×25×40）の規模である。南壁際中央部の出入り口に位置するP5・6は、主柱穴とは対称的に住居址長軸方向に長く、60cmの間隔をもって並列する。P5は15×32×25cm（堀方：20×34×30）、P6は13×30×30cm（堀方：26×40×35）の規模である。P6に接して存在するP7は南北方向に長軸を有する楕円形で、45×55×26cmである。柱穴的要素はなく上坑的であり、貯蔵穴と考えられ、通常遺物の出土も特徴的であるが、遺物は残されていなかった。P8・9は北東部のP1脇、東壁際に床構築土以下の堀方部分で検出されたものである。P8が60×40×55cm、P9が34×38×50cmの規模である。炉は北部のP1・2間の中央部やや北よりに位置する。炉破壊に伴う炭化物の掻き出しを想定される炭化物の分布が周辺に存在し、焼土・構築土器などは存在していない。30×35×20cmほどの堀方が確認された。

出土遺物は、弥生時代後期土器群（第6図1～7）である。残存状態の良いものは中央部やや南よりの

床面近くに底部を欠くが潰れた状態（写真9）で出土した櫛描波状文の甕（7）とその南側覆土中（写真9）の同じく底部を欠く櫛描波状文の小形甕（4）である。また、覆土中から櫛描波状文の甕（3・5・6）、内外面赤色塗彩の鉢（1）・赤色塗彩甕（2）が得られている。

#### （3）H3号住居址（第7図、写真11・12）

調査区西南端に位置し、西壁・南壁は開発範囲外であり調査は及んでいない。南壁と考えられる一部が調査区西南隅で確認されており、床面の南北長は3.1m程の規模にある。確認北壁長は2.5m、壁残高は35cmである。覆土は埋め戻された状況にあり、床面もはつきりした構築状態ではなかった。北壁中央付近にカマドの構築に関わると想定される浅い掘り込み部（50×50×10cm）が存在したが、ピットは確認されていない。不規則な堀方の深さは検出面から45～55cmを測る。以上の状態は通常の竪穴住居址とは考えられず、住居址とするならば構築途中での廃棄ということになろう。

出土遺物の大半は、覆土中に存在した弥生時代後期上層群であり、僅かな奈良時代の須恵器・土師器破片が検出されている。形状から弥生時代後期よりは奈良時代の遺構と考えておくことが妥当であろう。

#### （4）H4号住居址（第8図、表3、写真13・14・19）

調査区北東端に位置し、M1号溝状遺構の上部を破壊する。北壁・東壁側が調査区外であり、大半が最近の掘削で破壊されており全容は不明である。床面が確認できたのは西壁脇北側の極一部であり、西壁の立ち上がりを調査区北壁で確認したが、明確な状況の確認に至っていない。その床面には20×25×40cmのピット（P5）が存在していた。また、その南方において掘削においてピットの堀方部分が4箇所確認された。その配置から東西方向に上軸をもつ主柱穴（P1）、70cmの間隔をもって並列し南北方向に上軸を有する出入り口部施設柱穴（P2・3）、その東脇に隣接する貯蔵穴（P4）と理解できる状態にあり、確認された床面と同じ住居址のものとして判断した。P1は40×23×35cm、P2は30×48×34cm、P3は26×52×35cmの規模である。P4は大半が調査区外であり、確認部分は25×25×40cmである。

出土遺物は弥生時代後期の土器である。残存床面上に第8図1・2に示した内外面赤色塗彩の鉢2個体が並列して残されていた（写真13）。上記のピット配置は時期的に整合するものである。

### 3 ピット・周溝状堀方

調査区南東端のH1号住居址に破壊される位置で、ピット7基、周溝状堀方2基が確認された（第9図、写真15）。P2は焼土と考えられる堆積がありがと考えることも可能である。その場合P1をその上柱穴、内側の周溝をその堀方と想定できる。また、上坑状のP4を竪として把握すれば、両脇にあるP3・5をその主柱穴、外側の周溝をその堀方と考え得る。ただし、P2・4に炭化物等の竪としての確実な状況が少なく、P2の焼土も地山の赤色火砕流堆積との区別に問題がある。また、主柱穴の配置は弥生時代後期のあり方としての推定であるが、東西に長い形状とは異なり、確定はできない。以上、可能性として指摘しておこう。なお、両者の間に小ピット（P6・7）が確認されている。P1は30×25×50cm、P2は52×40×45cm、P3は46×52×35cm、P4は70×80×35cm、P5は40×26×40cm、P6は25×28×22cm、P7は20×25×22cmの規模である。

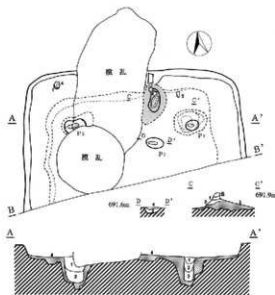
出土遺物は、P1覆土に弥生時代後期要底部破片が存在していた。

### 4 溝状遺構

#### （1）M1号溝状遺構（第10図、表4、写真16・20）

調査区を東西に横断する。遺構上部を調査区東側では掘削・H4号住居址に破壊され、調査区西側ではH2号住居址に破壊される。断面形は上部が開き下部が幅狭となる。検出面幅60～70cm、底面幅10～15cm、深さ90cm。東から西に傾斜し東西端底面比高差は40cmである。この溝状遺構の広がり、東側の西一本柳遺跡跡の調査区で溝頭から本調査区に至る長さ80mが調査されており、西側の西一本柳遺跡跡の調査区で本調査区からさらに西に延びる（長さ50m以上）状況が確認されている。

覆土1層から弥生時代中期土器群が検出されている。第10図1・2に壺・台付壺破片を図示した。なお、Ⅷの調査区では、覆土最上部に弥生時代中期土器群が一括廃棄されるあり方が確認されている。



A・B 100m

- I層 黒褐色土(10YR3/2) 耕作土。  
 II層 黒褐色土(10YR3/2) パミス・小礫を含む。耕作土。  
 1層 黒褐色土(10YR3/2) パミス・ローム粒・炭化物を多く含む。  
 2層 黒褐色土(10YR3/1) パミス・ローム粒・炭化物を多く含む。  
 3層 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック(～3cm)を多量に含む。  
 4層 道方埋土 戻床状。  
 ローム土体。黒褐色土を含む。  
 上面黒褐色土を多く含む層状堆積。

カマド

- 1層 黒褐色土(7.5YR3/1) 粘質土。炭化物・炭土粒を含む。  
 2層 黒褐色土(7.5YR3/1) 粘質土。  
 3層 ローム・黒褐色土混土。炭床・道方埋土。

ビット

- 1層 暗褐色土(10YR3/2) パミス・ローム粒を含む。  
 2層 暗褐色土(10YR3/3) パミス・ローム粒を多く含む。  
 3層 暗褐色土(10YR3/3) パミス・ローム粒を多量にふくむ。  
 4層 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物・粘土粒を多量に含む。



0 (1:10) 2m



1



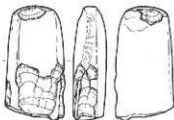
2



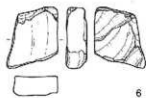
3



4



5



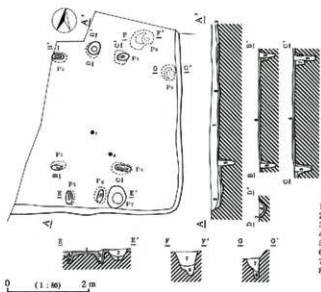
6

0 (1:10) 10cm

第5図 H1号住居址とその遺物

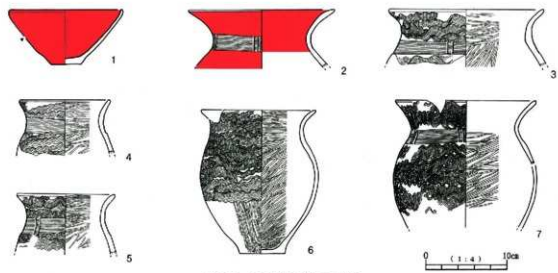
表1 H1号住居址の遺物観察表

No.	器種 材質	器形	法 量				成 形・調 整		出土位置	備考・実測方法
			口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重量	内 面	外 面		
1	須恵器	杯	15.0	10.2	4.1		ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ	II区覆土	火押痕あり 完全 回転
2	須恵器	杯	△13.4	△8.4	3.8		ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り 器底下部回転ヘラケズリ	II区覆土	回転
3	須恵器	杯	△13.8	△8.4	3.7		ロクロナデ	ロクロナデ 器底・ 器底下部回転ヘラケズリ	I区覆土	回転
4	須恵器	杯	15.0	8.0	4.8		ロクロナデ	ロクロナデ 器底・器底 下部持ちヘラケズリ	II区覆土	底部へへう記号 完全 弥生後期の産製石片を 転用
5	石器 輝緑岩	砥石	14.0	7.3	4.1	774.8			I区床面	
6	石器 砂岩	砥石	7.5	6.2	2.4	156.8			I区覆土	



A・G 6919m B～F 6917m

- 1層 暗褐色土(10YR3/3) パミス・ローム粒を多く含む。
- 2層 暗褐色土(10YR2/2) パミス・ローム粒を含む。
- 3層 黒色土(10YR2/1) 炭化物を多く含む。
- 4層 暗褐色土(10YR2/2) ローム粒・炭化物を含む。
- 5層 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒を多く含む。
- 6層 ローム主体、暗褐色土を含む。瓦片・磁方遺土。
- 7層 褐色土(10YR4/4) ロームを多量に含む。珪土。
- 8層 灰褐色土(10YR5/6) ローム主体、暗褐色土(～2cm)を含む。

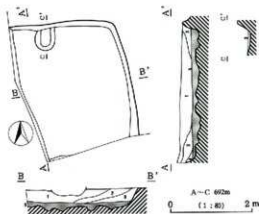


第6図 H2号住居址とその遺物

表2 H2号住居址の遺物観察表

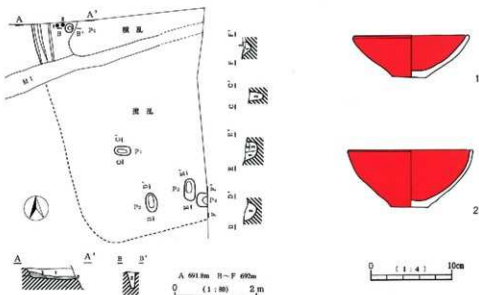
No.	器種 材質	器形	法 量			成形・調整		出土位置	備考・実測方法	
			口径(径寸)	底径(幅)	器高(厚寸)	重量	内 面			外 面
1	弥生	鉢	△14.0	3.8	6.7		ヘラミガキ 赤色塗彩	ヘラミガキ 赤色塗彩	覆土	完全
2	弥生	壺	△18.0		*7.2		口縁ヘラミガキ 赤色塗彩	ヘラミガキ 赤色塗彩 頸部磨擦状文 (13本3通止め)	覆土	回転
3	弥生	壺	△19.0		*7.0		ヘラミガキ	磨擦状文 磨擦状文 (10本2通止め)	覆土	回転
4	弥生	壺	11.2		*6.8		ヘラミガキ	磨擦状文 磨擦状文 (9本)	覆土	完全
5	弥生	壺	△12.0		*7.3		ヘラミガキ	磨擦状文 磨擦状文 (14本2通止め)	覆土	回転
6	弥生	壺	△14.0	5.6	17.6		ヘラミガキ	ヘラミガキ 磨擦状文	覆土	完全
7	弥生	壺	17.3		*15.7		ヘラミガキ	磨擦状文 磨擦状文 (15本3通止め, 8単位)	床面	完全





- 1層 緑褐色土(10YR3/3) パミス・ローム粒を多く含む。
- 2層 褐色土(10YR4/4) パミス・ロームブロック(～2cm)を多数に含む。
- 3層 黒褐色土(10YR3/2) パミス・ロームブロック(～3cm)を含む。
- 4層 褐色土(10YR4/4) パミス・ローム粒を多数に含む。
- 5層 ローム・黒褐色土混合、硬方埋土。

第7図 H3号住居址



- 1層 黒褐色土(10YR3/2) パミス・ローム粒・炭化物を含む。
- 2層 褐色土(10YR4/4) ロームと黒褐色土の混合土。硬床・硬方埋土。
- 3層 褐色土(10YR4/4) パミス・ロームブロック(～3cm)を多く含む。硬方埋土。

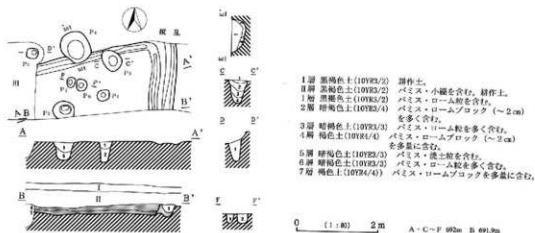
ピット

- 1層 緑褐色土(10YR3/3) パミス・ローム粒を含む。
- 2層 緑褐色土(10YR3/4) パミス・ローム粒を多く含む。
- 3層 褐色土(10YR4/4) パミス・ローム粒を多数に含む。

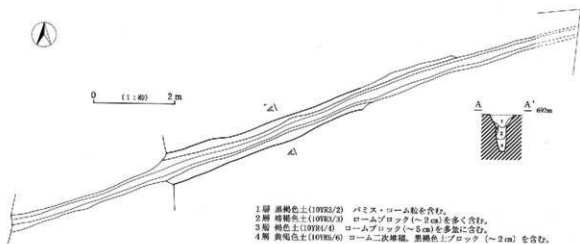
第8図 H4号住居址とその遺物

表3 H4号住居址の遺物観察表

No	器種 材質	器形	法 量			成形・調整		出土位置	備考・実測方法	
			口径(長径)	底径(短径)	器高(深さ)	重量	内 面			外 面
1	弥生	鉢	14.3	4.1	5.1		ヘラミガキ 赤色塗彩	ヘラミガキ 赤色塗彩	床面	完全
2	弥生	鉢	15.3	4.6	7.1		ヘラミガキ 赤色塗彩	ヘラミガキ 赤色塗彩	床面	完全



第9図 ビット・周溝状堀方



第10図 M1号溝状遺構とその遺物

表4 M1号溝状遺構遺物観察表

No.	器種 材質	器形	法 量			成形・装飾		出土位置	備考・実測方法	
			口径(直径)	底径(幅)	器高(厚さ)	重量	内 面			外 面
1	弥生	壺			≒7.9		ナデ	ハケ目	1層	回転
2	弥生	台付鉢	△6.8	≒4.9			ハラミガキ	深部ハケ模様線文 黒目 ハケ目 ハラミガキ	1層	回転



写真1 遺構を検出する（東より）



写真2 遺構を掘る（西より）



写真3 H1号住居址（南より）



写真4 H1号住居址の遺物出土状態（東より）



写真5 H1号住居址のカマド（南より）

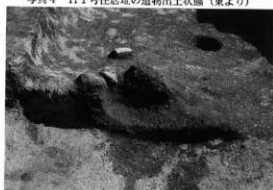


写真6 H1号住居址のカマド（西より）



写真7 H1号住居址の堀方（北より）



写真8 H2号住居址（北より）



写真9 H2号住居址遺物出土状態（西より）



写真10 H2号住居址の堀方（北より）



写真11 H3号住居址（南より）



写真12 H3号住居址の堀方（南東より）



写真13 H4号住居址の遺物出土状態（南より）



写真14 H4号住居址のピット（南より）

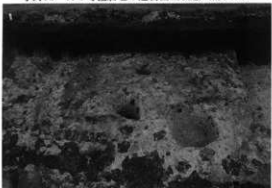


写真15 住居址のピット（北より）



写真16 M1号溝状遺構（東より）

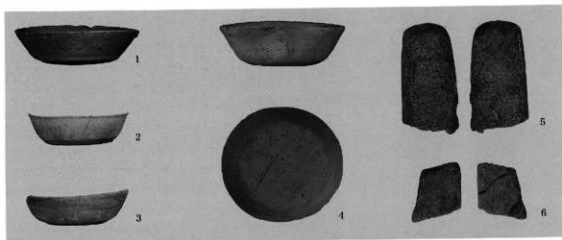


写真17 H1号住居址の土器と石器

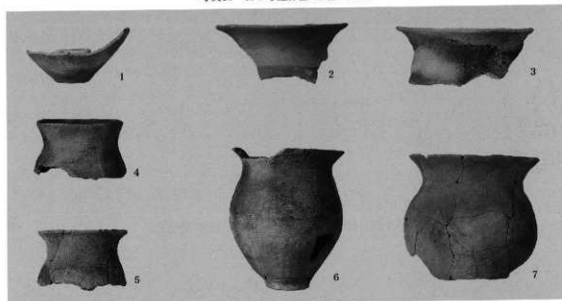


写真18 H2号住居址の土器

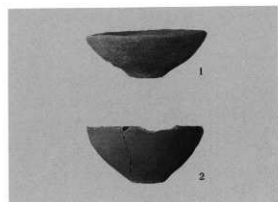


写真19 H4号住居址の土器

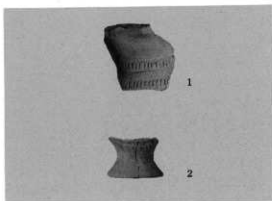


写真20 M1号溝状遺構の土器

## 報告書抄録

書名	岩村田遺跡群 西一本柳遺跡群
ふりがな	いわむらだいせきぐん にしいっぽんやなぎいせきじゅうなな
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第169集
編著者名	須藤隆司
編集・発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	2009. 3. 25
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市志賀5953
遺跡名	岩村田遺跡群 西一本柳遺跡群
遺跡所在地	佐久市岩村田字常木上2328-1
遺跡番号	52
緯度	36° 15' 59"
経度	139° 48' 5"
調査期間	2008. 9. 30~2008. 10. 9
調査面積	102m <sup>2</sup>
調査原因	店舗建設
種別	集落址
主な時代	弥生・奈良時代
遺跡概要	遺構 竪穴住居址・溝状遺構・ピット 遺物 弥生土器・土師器・須恵器・磁石・叢石（磨製石斧転用）
特記事項	

---

---

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第169集

岩村田遺跡群 西一本柳遺跡Ⅻ

長野県佐久市岩村田西一本柳遺跡Ⅻ発掘調査報告書

2009年3月25日

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

文化財課

〒385-0006 長野県佐久市志賀5953

TEL 0267-68-7321

印刷所 キクハラインク有限公司

---

---